輪島塗

輪島塗のあらまし

輪島塗がどのようにしてはじまったのかは、裏付けとなる資料が少なく、はっきりとはわかっていません。しかし、現在の輪島塗に使われている珪藻土が、輪島周辺で出土した中世の漆器にも含まれていたこと、またいくつかの記録から、室町時代には漆器作りが行われていたと考えられています。

漆器作りが発展した要因として、近隣にアテ、ケヤキ、ウルシ、輪島地の粉（じこ）など、材料となる素材が豊富にあったことや気候風土が漆器作りに適していたこと、古くから日本海航路の寄港地として材料や製品の運搬に便利であったことなどがあげられますが、漆器の生産・販売にたずさわってきた多くの人々が、品質に誇りを持ち、技術を磨き続け、今日まで受け継いできたことも大きな理由の一つといえます。

これらを背景として、「椀講（わんこう）」や「頼母子講（たのもしこう）」と呼ばれる独特の販売方法を普及させつつ販路を拡大し、全国的に知れられるようになりました。

工程は分業であり、大きくは木地、塗り、加飾に分かれます。さらにその中で、椀木地、曲物木地、指物木地、朴木地、下地、上塗、呂色、蒔絵、沈金等に細分されています。

この分業体制を基本に、塗りで百以上の手数を経て、完成までに半年から数年の時間を要します。緻密な職能分化によって、技術の熟達と生産効率の追求が図られ、各分野の技は伝統として受け継がれ、守られてきました。

各工程の専門職人は自身の仕事に自負を持ち、丹精を込めて仕上げます。その全てを確認し、調整するプロデューサー役を果すのが塗師屋（ぬしや）です。発注から販売、納品に至るまでを管理します。

うるしについて

うるしとは漆の木から採取した樹液です。丈夫で艶やかな質感をもつ塗料となり、強力な接着剤にもなります。東アジアの国々に分布し、日本では数千年も前から利用してきました。

漆の語源は「うるわし（麗し）」「うるむ（潤む）」ともいわれ、みずみずしい艶を表しています。

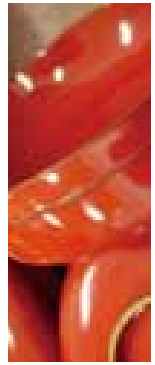
固まると酸やアルカリにも強く、数千年の時を超えるほどの耐久性を有しています。縄文時代の遺跡から出土した漆製品では、木地が朽ち果てたにもかかわらず、漆そのものは色鮮やかに保たれていることが確認されています。

その一方で、漆は大変デリケートな素材でもあります。採った時間や天候、場所、採り方によっても性質が変わってきます。

一本の木から採れる漆の量は150gほど。椀数個分しか採れない、大変貴重な材料です。

漆器はエコロジー

自然の恵みである木材と漆で作った漆器は、ほとんどが天然素材であり、微少な生産エネルギーで、有害な物質発生させることもなく、環境汚染や自然破壊が極めて少ない産物です。



漆の時間

漆の乾燥は、普通の化学塗料等と異なります。漆の成分が空気中の水分と反応し、硬化するのです。実はこの反応、漆器の完成後もゆっくりと進んでいます。よって、塗りあがって間もない製品は、できるだけ優しく扱ってください。

1年もすれば普通に使えるようになり、使い込んで3年も経つと深い底艶が出てきます。

漆器の扱い方

漆器は普段の扱いにおいて、少しだけ気をつけていただきたいことがあります。これさえ守っていただければ、暮しを豊かに彩り、歳月とともに味わい深いものとなります。

洗い方

家庭用中性洗剤で普通に洗っても大丈夫です。研磨材入の洗剤やタワシの使用を控え、表面がざらついた陶器等と別にして洗えば、キズが入ることを防げます。

避けて欲しいこと

電子レンジでは使わないでください。漆器が破損します。

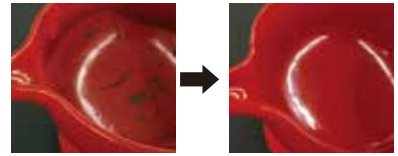
また、食器洗浄機を多用することも避けてください。艶が失われていきます。

保管場所

直射日光が長期間あたる場所や、極端に乾燥するようなところは避けてください。

修理

傷が付いても補修や塗り直しができます。輪島では昔から「なおしもん」と呼び、作り手の責任として修理を行ってきました。



木地

木地は器の用途によって形が異なり、それぞれに適した技法を専門とする職種に分かれています。材料となる木材もまた最適なものが選ばれます。

椀木地(わんきじ)

挽物木地ともいいます。ロクロとカンナを用いて椀、皿、鉢など、丸い形の器を作ります。材料はケヤキ、ミズメザクラ、トチなどです。

指物木地(さしものきじ)

角物木地ともいいます。材料は主にアテ、ヒノキ、キリなどを使い、重箱、硯箱、膳、角盆を作ります。

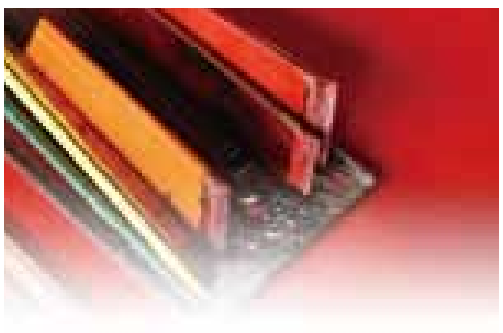
曲物木地(まげものきじ)

薄く加工した柾目板(木目が縦に通った材料)を水に浸し柔らかくして曲げ、丸盆や弁当箱などを作ります。材料はおもに良質のアテやヒノキなどです。

朴木地(ほおきじ)

刳物木地ともいいます。複雑な曲面が多い座卓や花台の足、銚子の口、スプーンなど、複雑な形を削り出す作業を専門とします。材料はホオ、アテ、カツラなどです。

髹漆(きゅうしつ)



輪島塗の特徴は塗りにあります。それは「本堅地(ほんかたじ)」本堅地(ほんかたじ)と呼ばれる漆器の伝統的な下地技法です。輪島はこの技法にこだわり続け、質の向上を図り、伝統として定着させたのです。

下地

木地の破損しやすい部分に布を漆で貼り付ける布着せ(ぬのきせ)を行い、下地漆には輪島地の粉(じのこ)と呼ばれる地元産珪藻土を焼成粉末化したものを混ぜます。珪藻土は断熱性に優れ、漆と結び付くことで非常に丈夫な塗膜を作ります。

地の粉粒子が粗いものから細かなものへと、一辺地、二辺地、三辺地の順に重ねます。その度ごとに時間をかけて乾燥させ、研ぎを繰り返し、縁などに漆を塗り付ける、地縁引き(じぶちびき)と呼ばれる作業を行います。そして徐々にきめ細かな肌合いへと変化させていきます。

下地作業は「地付け(じつけ)」とも言い、素地の性質を知ったうえでの作業手順、器全体の造形も考慮した地の厚みや、それに伴う研ぎが求められます。品格のある器に仕上げるため、ごまかしの利かない重要な工程です。

上塗

上塗では、上質の精製漆を刷毛塗りします。ホコリを極端に嫌い、細心の注意を払いながら作業が行われます。一つ一つ性質の異なる様々な漆を使い分け、その時の季節や気候状況に合わせ、いつでも最適な塗膜が得られるよう、漆を調合することが、技術と経験に裏付けされた上塗職人の実力です。

加飾

堅牢優美と評される輪島塗の特徴を支えるのが、蒔絵や沈金をはじめとした美しい装飾です。彩りを添えることで、漆器に新たな魅力が加わります。

呂色(ろいろ)

塗りの仕上げには大きく塗立(ぬりたて)と呂色があります。上塗の肌をそのまま活かす塗立に対し、呂色では専用の研炭で平滑に砥ぎ、漆を摺り込みながら磨く作業を繰り返します。最後には人の柔らかな手で磨き上げます。漆特有の奥深く艶やかな質感が引き立ちます。

表面の仕上げは、呂色や塗立の他にも様々に発展しています。乾漆粉や金粉、みじん貝等を蒔いて仕上げる変塗(かわりぬり)の一部も呂色師の仕事です。

蒔絵(まきえ)

筆に漆を付けて描き、金銀粉を蒔き付けて定着させ、文様を表します。平蒔絵、研出蒔絵、高蒔絵等の技法を駆使した多様な表現が可能です。他にも、螺鈿、平文、卵殻といった技法も蒔絵師の仕事となります。

沈金(ちんきん)

漆器の表面に文様を彫り、漆を摺り込み、金箔や金粉を入れ、装飾を施す技法です。基本的な線や点の彫りに加え、コスリ、片切など、刃先の形状によって多様な彫りが得られます。